

西郷隆盛とは



めた商品が巷に溢れていた。しかし、考えてみればそれとて変である。西郷隆盛は明治10年（一八七七）に西南戦争で明治政府に反旗を翻しており、いわば反乱者。それがいつのまにかその汚名をそそがれ、没後12年の明治22年（一八八九）には正三位を贈られていいのだ。

にも付いており、正式には隆道という。ところが名乗りを聞きに来た明治政府の役人が聞こえにくかったのか、慎吾が字を説明しようと「リュウドウ」と言ったのを聞き間違えて「ジユウドウ」としたので、歴史では隆盛の弟は「西郷従道」と呼ばれている。慎吾も訂正しに行つておらず、あつけらかんとしていた。そん

野公園に建つ西郷隆盛像は、高村光雲の作。大日本帝国憲法発布に伴う大赦で西郷隆盛＝逆徒の汚名が解かれたのをきっかけに吉井友実ら薩摩出身者が計画してできたもの。铸造者の岡崎雪馨はキヨツソーネのコンテ画をもとに西郷の知り合いなどに聞き、制作を進めたらしい。ところが公開に招かれた西郷の夫

しょに帰ろう」と誘う中で彼が言うのは、「お前達は隊士だから交わりが少ないが、私は接することが多かつたからか彼の魅力の虜になつてしまつていて」との理由。だから共に死ぬしかないと帰國を断つたそう。その言葉通り、白杵士族の隊長は城山で亡くなつている。こういった魅力を薩摩の人達は肌で感じて

（二）族言と方言

今でこそ坂本龍馬が幕末期の人気人物といわれているが、司馬遼太郎が「竜馬がゆく」を上梓するまでは、マイナーな人物だった。現に司馬は龍馬を干デルに小説を書くと決めた時、知人から「なぜそんなマイナーな人物を主役にするのか」と問われている。ところが同書がベストセラーとなり、内容も面白かつたのでその人気は鰐登りになつていき、幕末第一級の英傑と思われるに至った。それまでは西郷隆盛がそのポストに座つており、彼を模した貯金箱や彼を絵

になつてゐるのだが、薩英戦争を経験して混乱した薩摩はどうしても彼が必要で、盟友・大久保らの働きかけもあって幕末動乱期に復帰。その後、歴史に名を残すほどの活動を果たすのだ。

齊彬政権下で東奔西走したり、勝海舟などの有力人物と知己を得たりして、いたのでそれまでも全くの無名ではなかつたが、戦でさらに名を高めた。西郷隆盛の初陣と呼ばれるのは38歳になつてから（動乱期でも戦争はないので仕方のないことだが）。禁門の変（蛤御門の変）がその舞台である。これは文久3年8月18日の政変で京を追われた長州勢が奪回を図るべく、攻め入った事件である。ここで西郷隆盛は洋式銃隊を率いて指揮を取り、苦戦する会津・桑名両藩を助けて長州勢を撃退している。この働きにより京に駐在していた大名家の藩士にその名が轟いたという。

西郷隆盛と大久保利通は、幕末・維新の英傑で、この二人がいなければ明治といふ近代国家はやつて来なかつたであろう。西郷隆盛は、文政10年（1828）に鹿児島城下の加治屋町で生を受けた。下級武士の子で、当初は郡方書役助をしていたが、島津斉彬が藩主になると、その才を買われ、江戸出立の庭方役に加えられている。斉彬は次期将軍に一橋（徳川）慶喜を推しており、西郷隆盛はその調整工作をしながら色々な人物と繋がつたようだ。その一人が僧・月照。彼を伴つて薩摩入りするのだが、斉彬の死自殺を図つている。幸い一死はとりとめたが、奄美大島へ島送りになつた。

西郷隆盛は、その生涯で二度の島送り

西郷隆盛という人は、色んな意味で風変わりな人物だ。まず、我々が呼んでいる「隆盛」という名は彼の真の名前ではない。彼は51年の生涯において13もの名前を使っている。西郷家の嫡男として生まれた時は小吉と呼ばれ、元服すると吉之助、もしくは隆永である。流刑になつて菊池源吾と変名し、帰国後、大島姓を名乗つたのは例外として、大半は西郷吉之助というのが多い。昔は今と違つて諱や呼び名などがあつた。西郷のそれは、名乗りは隆永で、通称が吉之助だった。明治になつて新政府に名前を届けた。際に吉井友実が間違えた。吉井は西郷の名乗りを忘れてしまい、「確か、隆盛だつたか」と登録してしまつたのだ。実は「隆盛」は西郷の父・吉兵衛の名乗りで、正式には「隆永」である。その登録名を聞いても西郷吉之助は「おいは隆盛でござわすか」と平然としており、訂正に行かなかつたそうだ。ちなみに西郷隆盛の弟・従道にも同じような話がある。西郷家は代々「隆」の字を名前につける。当然ながら隆盛の弟・慎吾(これは通称)

もう一つ、不可思議な話を書いておく。それは、今の世に伝わる西郷隆盛の肖像画が正確には本人のものではないという話。幕末期に写真技術が日本に入ってきたおかげで多くの偉人達の顔を知ることができる。有名なのは坂本龍馬の写真。数枚ある中で知られているのは慶応3年（1867）に長崎の上野彦馬か、その弟子・井上俊三が撮ったとされる一枚だ。このように新しい技術を面白がって色んな人物がその姿を残している。だが、西郷隆盛には一枚も写真がない。顔を晒してしまうと命を狙われるから嫌つたとの説もあるが、単なる写真嫌いだったのではないだろうか。

我々が西郷隆盛と崇めている肖像画は、明治11年（1878）にイタリア人の銅版画家・キヨツソーネが描いたもの。当然ながらキヨツソーネは、西郷隆盛と面識がなく、弟の従道といとこの大山巣を参考にして描いている。これが意外と似ているとの証言もあつたためにこの肖像画がよく使われているのだ。上

人・糸子は「うちの主人は、こんなんじゃないなかつた」と発し、ラフなスタイルで犬を連れている姿を見て「浴衣姿で散歩なんてしない」と周囲の人に語つたと伝えられている。西郷隆盛の写真とされるものが世に出回り、一時は土産物として売られていた時代もあるにはあった。これとて偽物で、今ではそれが永山弥二郎の写真だとわかつていい。昭和37年（1962）に大塚安子が俗にいう「群像写真」を取り上げ、その中の一人が西郷隆盛だと発表したが、これも聞きとりによって小田原瑞智ではとしている向きもある。このように今の世でも論争が絶えないのも彼が英傑たる所以だらう。

西郷隆盛人気は、やはり彼の人柄によると所が大きい。彼の人物的魅力を示すものとしてこんな話がある。西南戦争では白杵（大分）の士族も戦に加わつてゐる。薩摩軍の敗戦が濃くなつた時、白杵の老人が遣いをやり、「鹿児島県人ではないから帰つてこい」と諭した。一同が帰る中で隊長のみは残つて西郷隆盛といつしょに死ぬと言い出した。「いつ

Summer & Autumn 2017 さんふらわあ